

誕生日

帰りの道すがら、集合住宅というのは一体なんなのだろうかと考えた。箱の中に箱があって、それを家だと有り難がって住んでいる。家も人間も全て気色が悪い。何かを有り難がる人間と関わりたくない。外が寒いから全てが嫌だった。

『お近づきのしるしに、眉毛を筆らせてくれるんですよ。だって溶けているんですから。』箱に入ると、点けたままのテレビがベッドに話しかけていた。ニュース以外の番組を久しぶりにみたけど、相変わらず意味がわからない。

懐かしい着信音があった。キャリアメールが届くのは久しぶりだ。祖父から誕生日を祝うメールが届いていた。そういえば免許証に書いてある誕生日は今日だった気もする。返信する気力はなかった。

飽きていた。誕生日を祝っているふりをして、喜んでいるふりをして、時間が共有するふりをする。他人が自然にできていることも私にとってはすべてふりだった。『飽きてくるくせに、誤魔化してんのー、もう何もなくて漫画の女の子も言った気がする。実家に置いてきた華倫変を読み返したくなった。』

この顔になつたらうまくいくと理由もなく思っていた。

ただ、何も変わらなかった。正確には他人が少し優しくなった気がするけど、今更どうでもよかった。携帯のゲームには、免許証に書いてある誕生日じゃなくてこの顔の誕生日を登録してあるけれど、何も登録しないほうが疲れなくて良かったな。

祖父に何も言わないまま気が問えてた方が疲れる気がして、差し障りのない返信をしておいた。